トピック

量刑事件でストーリーを語る重要性 (2018年模擬評議の弁護人として)

刑事弁護委員会委員 赤木 竜太郎 (67期)
委員 須崎 友里 (67期)

2018年8月4日及び5日の2日間にわたって三庁合同模擬評議が開催された。私たちは、弁護人役として弁護活動を行った。本稿では弁護方針やそれに対する裁判官や裁判員の評価を交え報告する。

1 事案の概要

植木職人であった被告人は、真面目に仕事をしてきたものの、入院中の養母の入院費を払っており、生活に困窮していた。暴走族時代の先輩である山室衛から、入院費等を捻出するため、20万円を借りたところ、執拗に返済を迫られるに至った。

事件当日、被告人は山室らに呼び出され、借金の返済を迫られた。帰り道、山室と同伴したタクシー車内において、先に降車する山室から、「明日までに全額持ってこい！ そうしないと母親から直接取り立てるぞ。〇〇病院だぞ、分かってるからな」と告げられた。その後、運転手が「借りた金は返さなきゃいけないよ」と声をかけた。このとき運転席付近に現金の入った封筒が目に入った。咄嗟に被告人はその金を奪うことを決意した。偶然持っていた植木ばさみを運転手に近づけ、「金を出せ」と言ったところ、揉み合いになったため、運転手の顔面を1回手拳で殴打した。運転手が失神したため、動揺した被告人は、現金を取らずに逃走した。事件後、自ら110番通報した。

運転手は加療約1か月の右下顎骨骨折の傷害を負った。

後日、示談金として50万円用意したが被害者は受け取りを拒否した。

2 弁護方針

目標は執行猶予判決である。しかし、本件は、傷害結果が重く示談もできていない実刑の可能性が高い事案だった。そこで、本件の動機・経緯を前面に押し出したストーリーを提示し、裁判員に共感してもらうことにより、責任非難の程度を大きく弱めることによって、執行猶予を狙う方針を立てた。

具体的には、計画性が全くない行き当たりばったりの事案であるということ、さらにそこに至った経緯には、借金の返済を迫られ、養母からの取り立てを迫られて追い詰められ、いくつもの偶然の事情が重なり、犯行の決意に至ったとの事情である。

弁護人は、「母親のことを想い、追い詰められた被告人が咄嗟に一線を越えてしまった。咄嗟に一線を越えてしまったに過ぎない被告人は、社会の中に復帰して更生することも、また容易であるはずである」とのストーリーを提示することにした。

これを踏まえ、冒頭陳述では、詳細にストーリーを語り、被告人質問では生い立ちから順を追って事実を語らせることにした。被害者反対尋問では、端的に被告人は積極的に被害者を傷つけようとしていないということを獲得することにした。最終弁論では、行為の客観的危険性についても触れた上で、半分以上を動機・経緯が責任を減ずるという部分に割いた。

3 評議での議論

評議は4日14時ころから17時ころまで、5日9時ころから14時ころまでの間行われた。評議の半分以上が動機・経緯が量刑にどう影響するかについての議論だった。その中で、以下のような意見が述べられた。

- 検察官の「金欲しさの犯行動機に酌量の余地はない」との表現があまりに一方的で強すぎる。
- 消費者金融など、強盗以外にも金を作る手段は他にはあったかもしれないが、教育を受けていない被告人には思いつかなかったのではないか、という弁護人の指摘もわかる。
- 母を支えて8年間頑張っていたのだから酌量する余地があるのではないか。遊びの金欲しさという事案とはやはり違う。
- 浅はかだなどは思うけども、母の病院代、というような事情を聞くと、感情的には「軽くしてあげたい」という方向に傾いてしまう。
- 被告人には強盗以外の他の手段はあり得たはずであり、やはり非難に値する。実際に、事件後には示談金原資として、結果として50万円は集められている。
- いかにか被告人が困っていたとはいえ、それを落ち度のない被害者に向けるのはおかしい。
- 山室の言葉の前に1か月の催告もあったし、そこに至ったのには被告人にも落ち度はある。
- 山室の言葉自体、強いものだったのか。母親に暴力振るうぞとは言っていない。
- 被告人は、被害者の言葉を聞いて腹をたて「この人なら（お金を）とってもいいや」と思ったと言っていた。この点で、別の非難が生まれるのではないか。

このような議論を経た後、言い渡された判決は懲役4年6月であった。

4 総括

動機・経緯がさほど重要な要素にならないとされる強盗致傷罪において、ある程度刑を減ずる要素として判断してもらえたのは弁護活動の成果といえたと思う。裁判長がDVD研修において「責任非難の程度」をどのように考えるべきかは、裁判官の中でも議論が定まっていなかったと述べていた。弁護人の各量刑要素に対する主張の仕方で量刑事件の判断は無限に広がることが確認できた。

評議の冒頭、執行猶予にしたいという裁判員が何人かいたこと、評議中も、動機や経緯に関する点を大きく斟酌すべきと考える裁判員もいたことから、各量刑要素をバラバラに主張するのではない、一つのストーリーを軸にした弁護活動は、奏功したと思われる。しかし、執行猶予とならなかったのは、裁判長からも指摘があった通り、本件の動機・経緯が責任を減ずる「理由」をより詳細に説明すべきであったこと、弁護人ストーリーに不利に作用する事情の抽出、検討が不十分であったことと思われる。とくに、被告人質問の「この人なら（お金を）とってもいいや」という発言をフォローしなかったのが致命的だった。この発言のために、追い詰められた経緯や、山室を止めたいという動機の犯行に対する影響は大きくはないという評価をされてしまった。

また、犯行直後に自ら通報した、という事情を犯情に結びつけて語ることができたのではないかと、この指摘も受けた。弁論では、咄嗟の犯行だという趣旨の議論の中で触れたつもりでいたが、もっと明確に述べないと伝わらないことを痛感した。

反省点もあるが、本件において、ストーリーの持つ力を再確認できたこと、弁護人の主張の仕方、力点の置き方で量刑判断を動かすことができたと確認できたことは大きな収穫だった。今後も、量刑判断の新しい常識をつくるべく弁護活動を行っていきたい。